よみがえる文化財

美術品修復の現場から

□■3

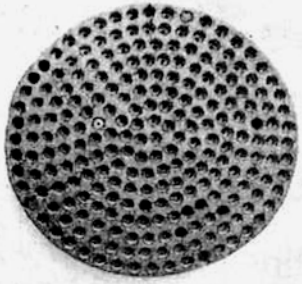
モノのすごさと限界

吉備国際大教授
臼井洋輔氏

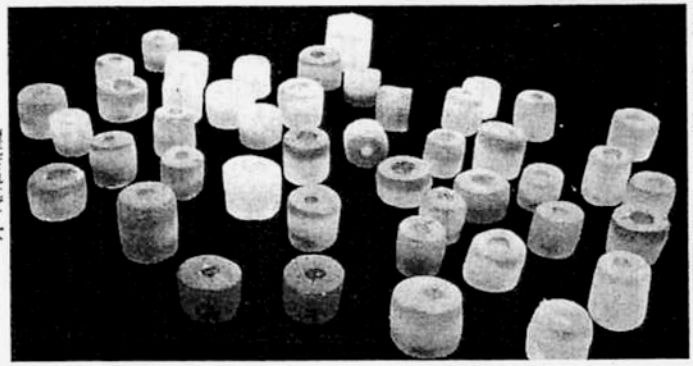
多少極端な話になりますが、文献を中心に研究する人は文献が絶対信頼できると思っており、現物（モノ）を中心に研究する人はモノこそすべてだと思うところがあります。それはおのおの自分の仕事に誇りを持つことにおいて当然のことでもあります。

私はこれまで文化財からあらゆる情報を引き出すという仕事を実証科学の立場からやってきた関係から、現物主義、現地主義を貫いてきました。つまりモノを絶対視してきたきらいがあります。

ところがつい最近、「モノこそすべて」「モノさえ観察すればモノが教えてくれる」と信じていたことも、絶対ではないという発見をして、驚きと戸惑いを覚えています。今回はそのことをお話ししたいと思います。



西アフリカの多孔土盤。全く同じものが奈良・平城京跡からも出土している



復元されたビーズ

◆多孔土盤とビーズのなぞ

わが国において4世紀から8世紀にかけての「多孔土盤」というものがここ20年くらいの間に出土例が報告されるようになり、鋳造技法によるビーズが作られていたということが分かってきました。しかし、いざその土盤を使ってどのようにしてビーズを作ったかとなると、依然不明のままでした。土盤の孔に溶けたガラスを流し込むとか、ビーズの穴を作るためには最初に差し込んでおく針金が必要であるとか、それこそ技法解明のために出土盤を熱心に観察して多くの人が再現に取り組んできました。しかし、誰もが納得するようなものは出来ていませんでした。

日本ではビーズで身を飾る習慣が奈良時代で無くなりましたが、西アフリカの女性は今も生活習慣上必要なために、かつての日本と全く同じ多孔土盤でビーズが作り続けられています。日本との関連を調べるために現地調査した結果、驚くことがたくさん発見できました。

◆アフリカでの現地調査

アフリカの鋳造技法では800度という低温で行うとか、二度焼成の工程が必ず必要であるとか、剝離剤が不可欠であるとか、ビーズ穴を形成する心棒材は決して燃えない鉄のような素材ではなく、逆に燃え切るものを使うとか、心棒材とガラスの化学反応を防ぐ工夫があるとかです。これらすべては昨年9月、私がアフリカで調査するまで思いもよらないことばかりでした。

つまりそれら無形の技術に関するものは、土盤には全く痕跡を残さないものばかりだったのです。焼成温度が何度であったのかも形には表れません。しかもそれこそがビーズ作りの一番大切なことだったのです。まして1回焼いたのか2回焼いたのかとか、剝離剤が何であったかも、出土した土盤からは決して分かりません。心棒は燃えないものという先入観から誰もが抜け出すことが出来ませんでしたが、実際は燃えるものであったのです。燃えてしまえばこれまた土盤には何も残りません。

◆モノが教えるものと限界

このように日本の古代ビーズ技法の究明は、日本の出土遺物からだけではどうしても限界があるということを見せつけられたのです。こうして突きつけられたのはモノがすべてを教えてくれるわけではないということなのです。

このようにモノからすべてが分かると信じていた自分にとって、その考えが一瞬衝撃的にぐらつきました。このように実物資料（モノ）にも限界もあるということを知ることは、後進の者がより真実を見抜けるように、より幅のある観点から攻めることの大切さを示したことになると思います。

モノが正しいか、文献が正しいかではなく、どちらもそれなりに正しく、どちらも限界があることを知った方が、さらなる真実に近づけるような気がします。

現代社会が陥っている一つの困難さも同様で、「視点のグローバルスタンダード化（自分には優しく他人には厳しい社会現象にも通じる）」が示しているような現代人の錯覚に起因するものがあるような気がします。